

Philip Burton
Language in the Confessions of Augustine

Oxford University Press, 2007, pp. xii + 198

松 崎 一 平

著者の Philip Burton は、2000 年に刊行された *The Old Latin Gospels, A Study of their Texts and Language*, Oxford University Press の著者であり、翌 2001 年に Everyman's Library の一冊として上梓された *Augustine, The Confessions* の英訳者でもある。ラテン語訳聖書の研究者でもある Burton (バーミンガム大学で新約聖書研究および聖書の諸言語の講師のポストにあるという) が、『告白』(以下 *Conf.* と略す) の全訳を、おそらく多大な苦労を重ねてなしとげたことが、本書が豊かな成果をあげることを可能にしたと思われる。

まず全体の構成。短い Preface のあと、1. *Sermo*, 2. *Alternative Comedy: The Language of the Theatre*, 3. *The Vocabulary of the Liberal Arts*, 4. *Talking Books*, 5. *Biblical Idioms in the Confessions*, 6. *The Paralinguistic*, 7. *Epilogue* の 7 つの章、さらに *Appendix* として、*Greek Words in the Confessions* が置かれ、最後に、*Bibliography*, *Index locorum*, *Index rerum*, *Index verborum graecorum*, *Index verborum latinorum* が付されている。

Preface で、第 3 章、第 6 章、第 7 章は、それぞれ既発表の論文にもとづくといわれているとおり、かならずしも全体が緊密に構成されているというふうではないが、各章の題名からも直ちに見て取れるように、本書は、*Conf.* という著作の深い含蓄を、広義のことば(言語)を徹底的に手がかりにすることをとおして、それぞれの章でそれぞれの局面において明らかにすることを試みている。そして、各章の考察が相互に支え合い、*Conf.* という著作の全体を考察することにも成功している。

評者にとって、かならずしもわかりやすいわけではないが、本書で著者が *Conf.* の language を考察するさいの基本的な立場が表明されている第 1 章を、

まずていねいに読み、しかるのちに、紙幅のゆるすかぎり、全体の構成にとらわれないで、内容を概観していこう。

*

本書の書名に language というとき、著者の念頭にあるのは、たんにギリシア語とかラテン語とかばかりではなく、叫び声や、あるいは自然物が語るかも知れない広義のことば (Vergilius, *Ecloga*, VI, ll. 43-4) も含まれる。さらに、Ignatius (*ad Ephes.* 4, 1-2, *ad Magnes.* 10, 3, *ad Philadelph.* 6, 12 など), Jerome (*Epistula*, 22, 35), Rufinus (*Historia Monachorum*, 4 ほか) を引きながら、アウグスティヌス (以下 Aug. と略す) の時代までのキリスト教では、宗教的生において、しばしば沈黙が求められた一方で、教えを伝えるために (イエス自身も教えを伝えるために言語を用いる), 言語の違いをこえて (*Act.* 2: 1-13) イエス・キリストを語るべきであるとされたことを指摘する。著者によると、むろん Aug. も、それらの流れのなかにあつて、言語にたいする複雑な態度を共有する。

著者によると、これまでの伝統的な研究では、神学との言語の関係について、高度に哲学的な問いを扱いがちであり、文法の歴史や言語の理論化にかんする問いからも相当に遠ざかっていて、Aug. が用いている個別のことばや構文に興味をもつことはあつても、厳密に文献学的なアプローチからは距離がある。伝統的研究をこのように評価したうえで著者は、*Conf.* における Aug. の言語の用い方と言語にたいする態度とを、さらに両者の関係を、吟味し考察する、という (p. 10)。それは、*Conf.* は、そのなかで言語がとくに重要な意味をもつ書物だからであり、*Conf.* への興味が、比喩やパラドックスや、あるいは古典的用法とキリスト教的なそれとの微妙な緊張関係をとおして、Aug. が言語を駆使するその方法に向けられるからである。

著者は、神のロゴスと深くかかわる loquor ということば (およびそれに対応する名詞 sermo) の用例に、まず注目する。ヨハネ伝のなかで、イエスは「あなたはだれか」と問われて、「はじめ (principium) だ、わたしはあなたがたに語ってもいる (loquor) のだから」(8: 25) と答えている。いうまでもないことだが、著者によると、神のロゴスが語るということは、それが創造の始原であるということと、受肉したロゴス (キリスト・イエス) が人間たちに語った (福音書をかいて、いまなお語っている) ということと、さらに *De magistro*, 11, 38 が説くように人間のうちなる教師として語るということ (*Ret.* 1, 11 を参照) と

の、三つの局面をもつ（以上、pp. 14-17）。語るのは神ばかりではない。たとえば、*Conf.* 10, 6, 8 で「天地」が神への賛美を語るように、神の被造物もまた語る（*creatura loquens*）。*Ps.* 68: 35 には *laudent* とあるのを、*Aug.* があえて *loquuntur laudes tuas* といいかえていることを考えると、それは比喩以上のものかもしれない、と著者はいう（pp. 17-19）。むしろ、まさに理性的存在である人間こそは、ことばを語る存在（*homo loquens*）である。著者によると、*Aug.* は最初期の著作で、人間は社会的関係を築くために事物に呼び名（ことば）を与えたといっている（*De ordine*, 2, 12, 35）、人間がことばを作り出したと考えていたが、*Conf.* では、ことばを神の賜物と考えている（I, 5, 5; 6, 7 など）。じっさい、ことばは生命のしるしでもある。じじつ、ルカ伝で、ナインの寡婦の死んだ息子が、イエスのことばで生き返って「語りはじめた（*coepit loqui*）」と語られている（*Luc.* 7: 15）ことに著者は注意を促している。*Aug.* は、*Credo, propter quod et loquor.* という、*2Cor.* 4: 13 および *Ps.* 115: 10 にもとづく文を、*Conf.* で 2 度、引用してもいる（I, 5, 6; 11, 22, 28）。神を信じる者のみが語りうるし、真理を語りうる。信じない者は、ことばを失い、語ることができなくなる（*Luc.* 1: 20-22）。回心以前、*Aug.* は（理性的な）ことばを失っていたが、回心によってそれを回復した。まさに回心の帰結として、アフリカへ帰郷する途中、オステリアで、母と語り合う（*colloqui*）ことによって見神の体験を得た（9, 10, 23 以下）のは、とてもは象徴的なことだ（pp. 22-23）。その意味で、*Conf.* でマニ教徒が、*loquax* と形容されるのは興味深い。神を信じない者は、著者によると *homo loquax* ということになる。著者は、語尾が *-ax* となる形容詞がしばしば軽蔑的な意味をもつことを指摘し、O'Donnell の解釈なども踏まえて、*loquaces muti*（I, 4, 4）の解釈を試みている（p. 23）。

いっばんに著者の論述は、得られた論拠にたいして基本的に抑制的で、推論に推論を重ねて結論を導くということはない。ここでも、かならずしも明示的ではない著者のいわんとするところをあえて推測すると、*Aug.* にとって被造世界とは、被造物が真理を語るべき場にほかならず、究極的には神が、いわば人間の信仰をかいして真理を作り出す場にほかならない（ならば、「神について語ること」としての神学、すなわち、「テオロギア」は、キリスト教という生の本質をなすことになる。むしろ、沈黙もまた語りうる）。結局のところ、*Conf.* とはまさに、*Aug.* による、真理を語ること（*loqui veritatem*）によって「真理をつくる（*fa-*

cere veritatem)」(10, 1, 1) 試みにはかならない (p. 11 以下。また O'Donnell, *Augustine, Confessions, I*, 1992, p. xvii を参照)。回心以後, Aug. が聖書を持続的に学び, 理解し, そのことばを使いこなせるようになったことが, それを可能にしたということだろう。

著者は以上のように考察を重ねるが, その際に, Perseus Project が提供するデータを用いて, 所要所でキー・ワード (たとえば *loquor* がそうであるように) の使用頻度 (10000 語のなかでいくつを占めるか) を, 古典作品, ラテン語訳聖書 (場合によってはギリシア語 (訳) 聖書も), *Conf.* などに検証し, 比較している。著者によると, *Conf.* のことばの使用は, 一般に古典作品よりもラテン語訳聖書に近く, さらに, 自由学芸の語彙やギリシア語からの借用語, 抽象名詞の複数形などは, 軽蔑的な意味合いでつかわれる傾向にあるという (たとえば第3章や第5章)。

また第2章で著者は, *Conf.* のジャンルを特定することは困難としながらも, *Aeneis* がモデルの有力な候補であると指摘するとともに, *Conf.* が, いくつかの箇所では喜劇をふまえているという。たとえば, アリピウスがたまたま斧を拾ってもっていたために鉛盗みの濡れ衣を着せられて逮捕され, あやういところで解放されたエピソード (6, 9, 14-15) や, 少女モニカが家のワイン運搬係を務めているうちに, 飲酒癖に陥り, おなじ年頃の下女に, *meribibula* (山田訳では, 「呑んだくれのあまっちょ」) と激しくなじられて, きっぱりとその癖を断ち切ったエピソード (9, 8, 18) を取り上げて, ことばづかいや, あるいは老女や若者, 少年や少女が登場する点など, 喜劇の舞台設定と類似している点を指摘し, *Conf.* という著作の特質の一つを明らかにする。だが, 喜劇にそっくりなっているというわけではなく, それは, 喜劇の笑いとは一線を画しており (alternative comedy), 本来あるべきところ (信仰) にない者の苦境を, 同情の気持ちをもって笑うように促している。ことばづかいについてもいうと, たとえば, *Conf.* のなかで2度つかわれる, *euge, euge* (1, 13, 21; 10, 36, 59) ということばは, 喜劇ではいまのブラボーにあたる軽いやしことばだが, 詩編でも何度かつかわれ (34: 21 および 25: 39; 16: 69; 4), そこではねたみややかみの気持ちをも含意する。著者によると, Aug. は詩編の意味を意図的に踏襲することで, 喜劇でつかわれたことばを新しい次元に移しかえている。著者による指摘はここまでだが, さらに推論を重ねると, *Conf.* に見いだされる喜劇のモチーフや場面設定は, 回

想される自らの生に生じた、*Conf.* の著者にとって印象的だったできごと（それは結局、日常のなかに生じた神の恵みと見なされている）を生き生きと表現するために、おそらく意図的に用いられたと、評者には思われる。Aug. は、いわば古い革袋に新しい酒を注いで、*Conf.* を書いたということだ。

第4章では、ことばの集積としての書物が、第6章では、歌うことや、泣くこと、笑うことなどの感情の表現が、広義のことばとして取り上げられている。そこでも、著者は、古典文学や聖書で、それらがどのように扱われているかを検証して、*Conf.* におけるそれらの扱いの特性を指摘していく。

*

このように著者は、*Conf.* を、古典文学やラテン語訳聖書、さらに Aug. に先行するキリスト教の作家をも視野に入れた大きな文脈のなかに置き、ことばの使用頻度や使用例の分析をとおして、*Conf.* とそれらとの異同を明らかにしている（かならずしもラテン語聖書や古典文学を血肉化できているわけではないわたしたちが、*Conf.* を、それが書かれ読まれたいまにおいて理解することを目指すためには、文献学ないし言語研究の方法や成果に依拠するこの方法はきわめて有効である）。かくして著者 Burton によって、*Conf.* のことばやことばづかいがどのような点で先行する時代を受けついでいたのか、あるいは時代をこえていたのかが、すぐれて説得的なしかたで示され、それによって、ジャンルをこえ時代をこえた、*Conf.* という、まれなる（むしろ、奇跡的な、というべきかもしれない）著作の広く深い意義と魅力が、書かれて1600年あまりの歳月を経て、いまあらたに探りだされ始めたといっている。本書が今後の *Conf.* 研究にとって不可欠のものとなることを、わたしは確信する。

なお、本書について一つ残念なことは、引用箇所や参照箇所の表記の間違いが、評者が気づいただけでも、ざっと50カ所以上にのぼる点である。引用文の間違ひも散見する。幸いなことに決定的なミスはわずかであり、少し調べれば正しい情報が得られるたぐいのケアレス・ミスが大半であって、けっして本書の価値をおとしめるものではないが、読まれる場合には気をつけられたく、付記しておきたい。
